

〔普及の現場から〕

飼料イネ専用品種「モミロマン」の 新見地域適応性について

新見農業普及指導センター

1 はじめに

新見市では飼料イネ専用品種「クサノホシ」が平成20年から導入されていますが、全国的な作付拡大にともない、専用品種の種子確保が課題となっています。そこで、新たに地域で対応可能な適正品種を選定するため、平成21年に中晩生種で新品種の「モミロマン」について「クサノホシ」と比較検討して地域における適応性を実証し、生育や収量の比較検討を行いました。

2 実証ほ設置地区

新見市哲西町畑木 青谷営農組合

3 実証ほの概要

(1) ほ場の条件 (面積 9.6 a)

地形	標高	日照条件	土性
平坦	400m	良	黒ボク
作土深	排水性	地力	前作物
40cm	良	中	水稻

(2) 対象作目、供試品種：モミロマン
 対照品種：クサノホシ 参考品種：コシヒカリ

1) モミロマンの特性

日本晴れより遅い熟期（中晩生）で、粗玄米収量が高くTDN収量も高い。飼料用米にも利用可能。

耐病性に優れ、直播栽培でも多収。脱粒性は難で、玄米品質は著しく劣る。

2) クサノホシの特性

極晩生熟期で、茎葉と子実収量の両方が高く、茎葉の繁茂性が特に優れる。稈長は長いが、耐倒伏性はやや強。脱粒性はやや難で、極端な多肥は避ける。

(3) 実施方法

・栽培方式：移植栽培

移植時期：平成21年6月13日

栽植密度：

モミロマン (条間 21cm×株間 30cm)

クサノホシ (条間 21cm×株間 30cm)

コシヒカリ (条間 21cm×株間 30cm)

施肥方法：

元肥 (堆肥 1,000kg/10a)、追肥 (有り)

調査内容

生育調査 出穂期、稈長、穂長、穂数、

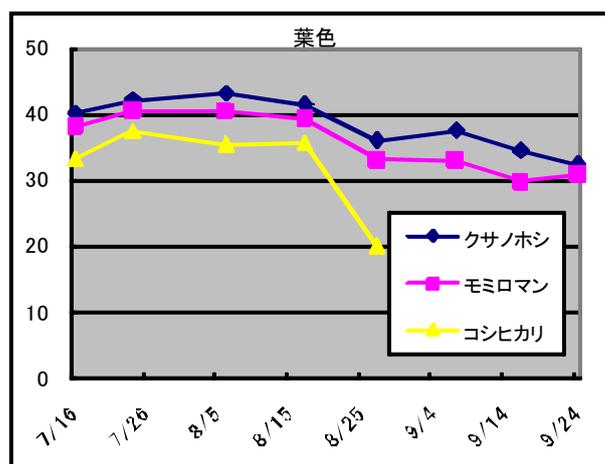
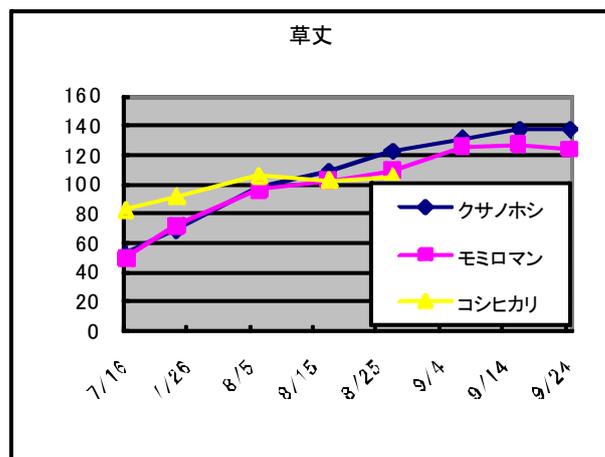
葉色、倒伏の程度、病虫害の発生状況等

収穫時調査 生草収量、乾物収量等

4 結果及び考察

(1) 生育調査

・初期生育については「モミロマン」、「クサノホシ」とも大差なく生育は順調でした。



表一 1 生育調査 (出穂期、稈長、穂長、穂数、葉色、倒伏の程度等)

品 種	株間条間 (cm)	施肥管理		出穂期	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本)	葉色 (SPAD)	倒伏の 程度
		基肥	追肥						
モミロマン	21.0 30.0	堆肥	有り	9月7日	83.7	21.5	13.5	30.9	無
クサノホシ	21.0 30.0	堆肥	有り	9月10日	95.5	20.0	13.2	32.3	無
(参考) コシヒカリ	21.0 30.0	堆肥	有り	8月6日	88.1	17.1	24.4	19.9	

(2) 収穫時調査

- ・生草収量、乾物収量とも「モミロマン」が「クサノホシ」よりもわずかに多かった。これは、出穂期がやや早い「モミロマン」は収穫時の生育ステージが「クサノホシ」に比べ進んでいたことが影響し

ているものと考えられ、一般に言われる収穫適期の黄熟期で調製すると2品種間の収量差はほとんど無いものと考えられます。

- ・倒伏は両品種とも見られませんでした。

表一 2 収穫時調査 生草収量、乾物収量等

区 分	収穫調査日	収穫ステージ	生草収量 (kg/10a)	乾物収量 (kg/10a)	乾物率 (%)	ロール数 (個)
モミロマン	9月24日	乳熟期	4,098	1,416	34.5	16.6
クサノホシ	9月24日	水熟期	3,965	1,413	35.6	16.1
(参考) コシヒカリ	8月27日	黄熟期	3,144	1,397	44.4	—

(3) 考察

- ・両品種は晩生種として熟期にやや違いが有るものの、収穫量に差はなく、「クサノホシ」と同様に「モミロマン」も新見地域で適応性が有ると考えられます。
- ・しかし、昨年度は天候の関係で両品種と

も生育が7~10日程度遅れたため、生育ステージが進まず、高水分サイレージとなりました。高水分の場合は発酵品質の低下が懸念されるため、乳酸菌等の添加物の利用も考慮する必要があります。

モミロマン 収穫時(乳熟期)の状況



モミロマン(左) クサノホシ(右)

